臨床報告

アトピー性皮膚炎に対する神仙太乙膏
と馬油の併用による治療

豊田 一

A Clinical Study of the Effectiveness of Combined Use of
Shinsen-Taitsuko and Mayu in the Treatment of Atopic Dermatitis

Hajime TOYOTA

M. D., Practitioner, 8, Misono-cho, Amagasaki-shi, Hyogo 660, Japan

Abstract Although steroid ointments produce a dramatic immediate effect, the effect is temporary and long-term use is associated with the appearance of a multitude of side-effects, and actually hinders treatment. There have also been recent reports that Vaseline, which is used to prevent dry skin, can be damaging to the skin.

Shinsentaitsuko (Japan Pharmacopeia), on the other hand, does not produce the side-effects associated with steroid ointments, and was found to have a cure rate of 98.1%

Key words: Atopic dermatitis, Shinsentaitsuko, Mayu

Nihon Toyo Igaku Zasshi (Japanese Journal of Oriental Medicine), 46, 263-267, 1995
(accepted 6 Apr, 1995)

はじめに

アトピー性皮膚炎に通常使用されているステロイド軟膏は、劇的に効果を表すかの如く見えるが、長期の連用によりステロイド皮膚症、白内障、緑内障などの種々の副作用が発現し、逆に治療の妨げとなる。また皮膚乾燥防止に使用されているワセリンにも、近時皮膚障害の報告がみられる。

著者は昭和59年の関西支部例会で一貫堂医学の立場から柴胡清肝散によるアトピー性皮膚炎の治療¹⁾、また平成2年の第41回学術総会では黄耆建中湯によるアトピー性皮膚炎の治療を発表して

きた²⁾。その際に併用する軟膏剤として、ステロイドの使用は中止し紫雲膏を使用して見たが効果があまり思わしくなかった。他に代るものとして和剤局方の神仙太乙膏を見付け使用してみたところ見るべき効果が得られた。その後、馬油との併用で一段と良い効果が得られ、現在ではアトピー性皮膚炎の全員に使用している。

症 例

昭和60年1月より平成5年12月までに、当院を受診したアトピー性皮膚炎の患者685例に内服薬とともに、外用に使用して良効が得られた。

1) 患者背景

医一開, 兵庫, 〒660 尼崎市御園町8

[1995年4月6日受理]

対象患者 685 名の年齢は生後 1 週間目より 54 歳迄であり罹患年齢は 1 歳未満が最も多く、男女比では男性 287 例 (41.9%), 女性 398 例 (58.1%) と女性が多い。共に表 1 に示す。

皮疹部位は表 2 にみられるように全身にわたるものが殆んどである。

罹患歴は表 3 の如く 5 年以上 10 年未満の例数が最高で 10 年以上がそれに次ぐ。

初診時の重症度については中等度が最も多く基準および例数を表 4 に示す。

既往歴 (表 5 参照) が無いものは 286 例 (43.5%) で、二つ以上のものも 297 例 (43.4%) にみられた。

併用薬剤は表 6 に示すように年齢が高くなるにしたがって増加し駆瘀血剤である桃核承気湯、通導散、桂枝茯苓丸は 16 歳以上の 154 例中 143 例に使用している。16 歳未満でも初潮発来後の女性には 20 例に使用した。

2) 投与方法

I, 投与部位 皮疹の部分全てに塗布した。

II, 投与方法 神仙太乙膏を塗布した上に馬油を重ねて塗布した。

III, 投与量 痒痒感が改善されるまで制限無く許可した。

IV, 投与期間 皮疹が改善されるまで表 7 に示すように 1 年から 2 年未満が最も多かった。

3) 結果

皮疹の改善度

685 例中、著効 602 例 (87.2%), 有効 46 例 (6.7%), やや有効 24 例 (3.5%), 無効 13 例 (1.9%) であった。表 8 に有効度判定基準及び例数を示す。

4) 代表症例

症例 1: 6 ヶ月男児。出産直後より額に皮疹を認め、小児科でステロイド軟膏を投与されていたが、全身に広がり肘、膝窩には滲出液を認める。黄耆建中湯 2.0/day を内服させ、神仙太乙膏と馬油を塗布、2 ヶ月後には皮疹は肘、膝窩を残すのみになり、6 ヶ月で治癒した。

症例 2: 8 歳女児。生後 1 ヶ月目より顔から皮

表 1 年齢および男女比

年齢	例数男(%)	例数女(%)
0- 1歳未満	37 (5.4)	84 (12.3)
1- 2歳未満	47 (6.9)	51 (7.4)
2- 5歳未満	42 (6.1)	47 (6.9)
5- 8歳未満	34 (5.0)	44 (6.4)
8-10歳未満	32 (4.7)	39 (5.7)
10-15歳未満	33 (4.8)	41 (6.0)
16-20歳未満	31 (4.5)	39 (5.7)
20歳以上	31 (4.5)	53 (7.7)
合計	287 (41.9)	398 (58.1)

表 2 皮疹部位

皮疹部位	例数(%)
全身	682 (99.60)
頭部のみ	1 (0.14)
身体のみ	2 (0.26)
手のみ	0 (0.00)
足のみ	0 (0.00)

表 3 罹患歴

罹患歴	例数(%)
3 ヶ月迄	98 (14.30)
3- 1年未満	51 (7.45)
1- 2年未満	57 (8.30)
2- 5年未満	111 (16.20)
5-10年未満	201 (29.35)
10年以上	167 (24.40)

表 4 重症度

重症度	例数(%)
軽度 (皮疹が身体の一部に限局)	16 (2.3)
中等度 (皮疹が全身にわたるもの)	486 (71.0)
重症 (皮疹が全身で滲出液も伴うもの)	183 (26.7)

疹が出始め、小児科でステロイド軟膏を投与されるも全身に広がる。黄耆建中湯 4.0/day を内服させ神仙太乙膏と馬油を塗布。4 ヶ月後には外陰部および臀部に皮疹を残すのみとなり、1 年 2 ヶ月で全治した。

表5 既往歴

既往歴	例数(%)
アレルギー性鼻炎	196 (28.6)
気管支喘息	357 (52.1)
慢性副鼻腔炎	96 (14.0)
慢性中耳炎	82 (11.9)
慢性扁桃炎	35 (5.1)
その他	43 (6.3)
既往歴無し	286 (43.5)

表6 併用薬剤

併用薬剤	例数(%)
消風散	196 (28.6)
十味敗毒湯	36 (5.3)
黄連解毒湯	48 (7.0)
温清飲	64 (9.3)
白虎加人参湯	39 (5.7)
柴胡清肝散	345 (50.4)
黄耆建中湯	281 (41.0)
越婢加朮湯	94 (13.7)
桃核承気湯	76 (11.1)
通導散	45 (6.6)
桂枝茯苓丸	239 (34.9)

表7 投与期間皮疹が改善されるまで

期間	例数(%)
3ヵ月まで	34 (5.0)
3ヵ月-1年未満	196 (28.6)
1年-2年未満	294 (42.9)
2年-5年未満	89 (13.0)
5年以上	72 (10.5)

表8 皮疹の改善度

治療効果	例数(%)
著効 (皮疹が完全に改善され正常の皮膚になったもの)	602 (87.9)
有効 (皮疹が殆ど改善されたが皮膚にまだざらつきあるもの)	46 (6.7)
やや有効 (皮疹は少し残っているが 掻痒感はないもの)	24 (3.5)
無効 (皮疹の掻痒感が増えたもの)	13 (1.9)

症例3：21歳女性。幼児よりアレルギー性鼻炎あり。18歳の時短大入学の為奈良から東京へ移ってから顔面に皮疹がで始め、皮膚科でステロイド軟膏の投与を受けるも2週間後にはひどく悪化した。全身からの滲出液がひどく、瘀血の証も認めるため消風散合桂枝茯苓丸を投与し神仙太乙膏と馬油の塗布を行うも東京で生活しているためもあってなかなか軽快せず、7ヵ月後には遂に休学し、郷里に帰ってきて治療に専念し始めてから段々と軽快し、その後3ヵ月でごく僅かの皮疹を残すだけの状態にまで回復した。

アトピー性皮膚炎の診断

血中 IgE 値は概して高く、症状の軽重と関係があるという者もあるが、著者は臨床症状から診断している。

臨床症状としては、年齢によりかなり異なった表現をとる。

1. 新生児一乳児期

0—2歳頃までは乳児湿潤型湿疹の形をとる。好発部位は顔面、頭部を主とし体幹、四肢にも生じる。紅斑、びらん面の上に厚い痂皮があり全体として湿潤性が強い。乳児湿潤型湿疹との区別は困難だが、アトピー性皮膚炎では難治性で次第に幼児期に移行していく。

2. 乳児期—学童期

3歳以降では、次第に乾燥型湿疹のタイプに移行する。皮膚は皮脂量が減少してカサカサし毛孔性小丘疹の隆起と角化が目立ち、小さい秕糠様落屑があり atopic skin の状態になる。掻痒のための掻破痕がみられる。病巣部は次第に表皮肥厚が目立ち苔癬化が著明になる。

3. 思春期以降

病巣は次第に限局性になり、特に肘、膝の屈側に苔癬化が著明である。約半数は思春期までに軽快するが、残りは難治性で続く。家婦湿疹、貨幣状湿疹、尋常性痒疹の型をとって来ることもある。

以上の3時期は連続的の場合もあり、ある時期にはひどくてある時期には軽いか、不連続的な経過をたどる場合もある。季節的には冬期にひど

く夏期に軽快することが多いが、四季に無関係のこともある。

考 案

神仙太乙膏は、当帰、玄参、肉桂、生乾地黄、赤芍薬、白芷、大黃から構成されており玄参、生乾地黄、赤芍薬、大黃が清熱薬があり、この為に消炎効果が優れている軟膏である⁸⁾。それに胡麻油、蜜蝋が加えられて市販されている。

原典には

神仙太乙膏「和剂局方」：八発癰疽，一切の悪瘡軟癰を治す。年月の深遠を問わず，已に膿を成すにも，未だ膿を成さざるにも，之を貼れば即ち効あり。蛇，虎，蝎，犬，湯火，刀斧に傷付けられるに，並びに内服，外貼すべし。背に発するには，先ず温水を以て瘡を洗い，拭き乾かし，帛子を用い薬を攤げ貼り，仍，水を用いて一粒を下す。血気には，木通酒にて下す。赤白帶下は当帰酒にて下す。咳嗽・喉閉・纏喉風には，並びに綿に裹み含み化す。一切の赤眼には，太陽穴に貼り，後に山梔子湯を用いて下す。打撲傷損には，薬を貼り，仍，橘皮湯を用いて下す。腰膝痛には，之を貼り，塩湯にて下す。唾血には，桑白皮湯にて下す。諸漏には，先ず塩湯を以て其の諸瘡癰を洗う。並びに大小を量り，紙を以て薬を攤げ之を貼り，並びに毎服一粒。桜桃大に旋円し，蛤粉を以て衣と為す。其の薬は十年を収めても壊れざるべし。愈久しく愈烈し，神効具に述べべからず。

川当帰（去蘆），玄参，肉桂（去粗皮），生乾地黄，赤芍薬，白芷，大黃各一両

上七味を剉み松子大の如くし，麻油二斤を用いて浸すこと，春は五日，夏は三日，秋は七日，冬は十日滓を濾し去り，油熬して所を得せしめ，次に黄丹一斤を下し，以て油を滴らして水中に在りて散ぜざるを度となす。

と記載されている⁴⁾。

構成生薬の薬能をあげてみると

＊当帰：甘辛苦温〔婦経〕心肝脾

1. 補血調経
2. 活血行気，止痛
3. 潤腸通便

＊玄参：苦鹹寒〔婦経〕肺胃腎

1. 滋陰涼血
2. 滋陰降火，解毒
3. 清熱軟堅
4. 潤腸通便

＊白芷：辛温〔婦経〕胃大腸肺

1. 散寒解表
2. 祛風止痛
3. 消腫排膿

＊肉桂：辛甘大熱〔婦経〕肝腎心脾胃

1. 温中補陽
2. 散寒止痛
3. 温通経脈

＊生乾地黄：甘苦寒〔婦経〕心肝腎

1. 清熱滋陰
2. 涼血止血
3. 生津止渴

＊赤芍：苦微寒〔婦経〕肝

1. 清熱涼血
2. 祛瘀止痛
3. 清肝泄火

＊大黃：苦寒〔婦経〕脾胃大腸肝心包

1. 浮熱通腸
2. 清熱浮火，涼血解毒
3. 行瘀破積
4. 清化湿熱

＊黄丹（鉛丹，丹）：辛微寒，有毒〔婦経〕心脾肝

1. 解毒止痒，収斂生肌
2. 墜痰鎮驚
3. 載瘡

である⁵⁾。

紫雲膏の構成生薬は当帰，紫根，胡麻油，蜜蝋，豚脂からなっており，清熱作用があるのは紫根だけなので消炎効果は神仙太乙膏より劣る。

＊紫根の薬能は，甘鹹寒〔婦経〕肝心

1. 涼血活血，解毒透疹
2. 利小便滑腸

である⁵⁾。

神仙太乙膏は寒剂温剂の配合が巧みであり，消炎後の創傷治癒促進効果にも優れている⁸⁾。

アトピー性皮膚炎にステロイド軟膏を塗布すれば、一時的に症状が改善されたかに見えるが、中止すると再燃し、また長期間の使用には種々の問題が多い。神仙太乙膏はステロイド軟膏ほど劇的な効果はないが副作用は殆んどなく長期にわたり使用が可能である。

馬油には皮膚組織に浸透する作用、殺菌作用、消炎作用、血行促進作用がある。名醫別録には「髪を生ず」と⁶⁾、また本章綱目は「面黥、手足の皴粗を治し、脂澤に入り、偏風の口喎僻を療すに用う」と記載されている^{7) 8)}。このことから馬油単独でも効果はある。また、馬油は皮膚の乾燥防止にも効果がある。馬油を併用すれば効果を増強することが可能であり皮膚の乾燥防止にも役立つ。

この論文の要旨は第45回日本東洋医学会学術総会で発表した。

要旨 ステロイド軟膏は、一時的には劇的に効果を表すかの如く見えるが、長期の連用により種々の副作用が発現し、逆に治療の妨げとなる。また皮膚乾燥防止に使用されているワセリンにも、近時皮膚障害の報告がみられる。和剤局方の神仙太乙膏にはステロイド軟膏にみられる副作用はなくアトピー性皮膚炎に対して89.1%の治癒効果が得られたので報告する。

キーワード：アトピー性皮膚炎，神仙太乙膏，馬油

文 献

- 1) 豊田 一：柴胡清肝散によるアトピー性皮膚炎の治験，日本東洋医学雑誌，第36巻第1号，1985，p.73
- 2) 豊田 一：黄耆建中湯によるアトピー性皮膚炎の治験，第41回日本東洋医学会学術総会抄録，1990，p.82
- 3) 豊田 一：神仙太乙膏による火傷の治験例，平成5年度日本東洋医学会関西支部例会講演要旨集，1993，p.18
- 4) 陳 師文編纂・吉富兵衛訓註：訓註 和剤局方，緑書房，1992
- 5) 神戸中医学研究会編著：中医臨床のための中薬学，医歯薬出版，1992
- 6) 梁・陶弘景 集，尚志鈞 輯校：名醫別録（輯校本）人民衛生出版，1986
- 7) 神農本草経，中医古籍出版社，1991
- 8) 神農本草経，臺灣中華書局印行，1976